

カンキツのユキヤナギアブラムシの薬剤感受性

近年、カンキツのユキヤナギアブラムシに対してネオニコチノイド系殺虫剤の効果不足が疑われる事例がみられたため、本系統薬剤の基礎活性評価と、各地の個体群の薬剤感受性検定を行った。

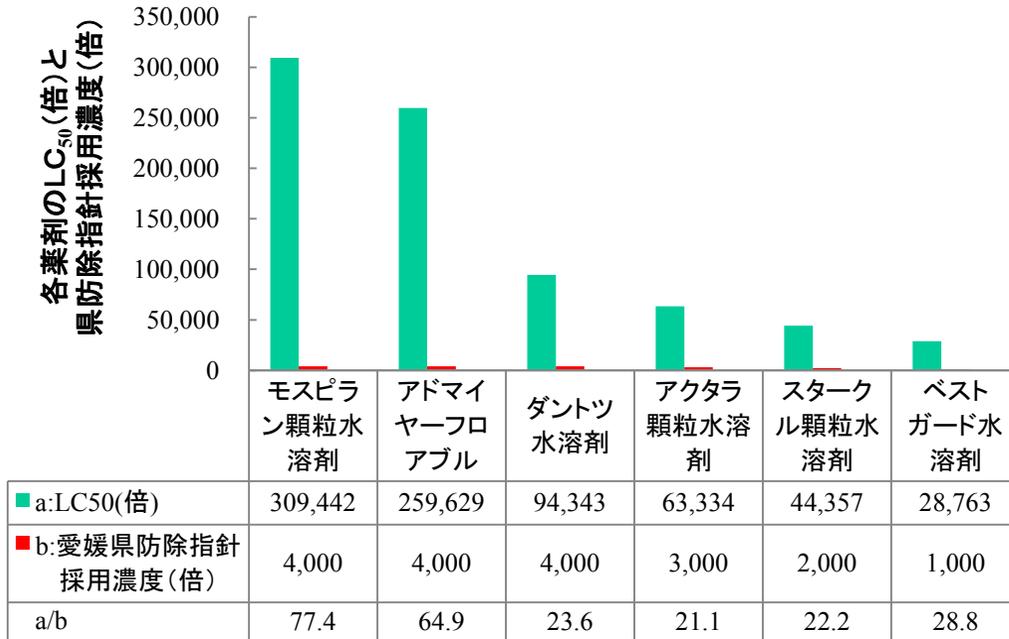


図1 ユキヤナギアブラムシに対するネオニコチノイド系殺虫剤のLC₅₀※
(虫体浸漬法・処理2日後調査・センター系個体群)

※LC₅₀(半数致死濃度)＝供試個体群の半数が試験期間内に死亡する濃度のこと、薬剤の感受性を評価する場合に用いられる。

いずれの薬剤も、採用濃度とLC₅₀の比が20倍以上であり効果が高い。
中でもモスピラン顆粒水溶剤とアドマイヤーフロアブルの効果が高い。

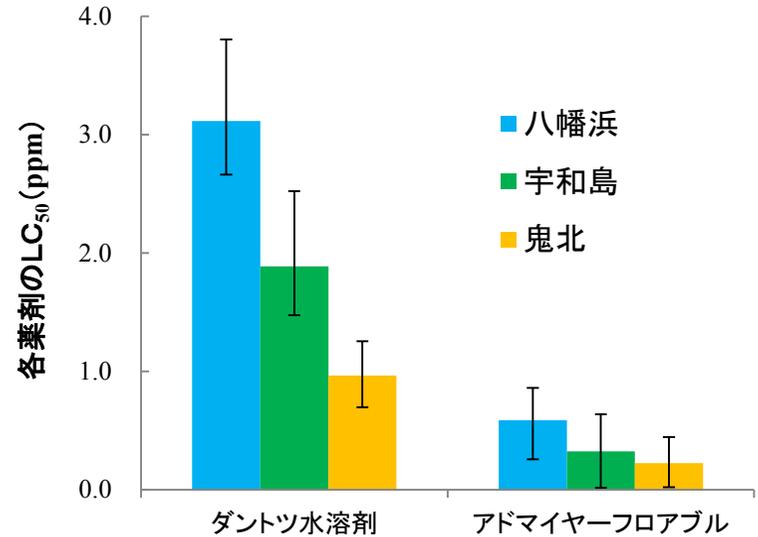


図2 各地のユキヤナギアブラムシのLC₅₀

ダントツ水溶剤は、鬼北系統（防除圧が低い園より採集）と比較して、八幡浜・宇和島系統ともに、感受性がやや低かった。但し、登録濃度は40ppmであり、両系統とも実用上問題となる程度の感受性の低下ではなかった。アドマイヤーフロアブルは各個体群間に明確な差は無かった。

以上のことから、ネオニコチノイド系殺虫剤は、現在でもユキヤナギアブラムシに対して効果が高いものの、一部の薬剤は感受性低下の兆候も見られており、本系統のみの連続散布ではなく、他系統薬剤（コルト顆粒水和剤・ウララ50DF・ハチハチフロアブル等）とのローテーション散布を行う必要があると考えられた。